

和名抄地名の有韻尾字訓注に

ついて

工藤 力男

佐佐木隆氏の和名抄に関する研究は、精緻な論証に支えられた強い説得力をもっており、私はいつも敬服して読んでおります。その佐佐木氏が本誌第百三十八集に寄せた〈短信〉——『和名類聚抄』地名訓の促音・撥音表記——は、学史的事実から見て、いささかうべないがたい点を含んでいると思います。

氏は、標題の件に関して、まず「これまで指摘されていないとおもわれる、つぎのような注目すべき促音標示の例がみえる。」として「菟田葛太」など四例を挙げますが、果してこれまで指摘されていないことでしょうか。むしろ、日本語史の学徒にとっては常識とでもいふべきことなので、誰もあえて口にはしなかったのではないかと、と私には思われます。例えば、春日政治氏の「連合仮名」の考え方も、あるいはかかる表記を含蓄していると言えるかもしれませぬ。少なくとも、私の経験に照らしても、昭和四十二年度、京都大学文学部で、浜田敦教授の講義「和名抄の地名」に出席した二十名ほどの受講生には、このことは常識になっていると思います。浜田教授はそのことを「促音沿革考」(『国語国文』第十四卷十号)で、かなり明確に書いています。もとより、それとても浜田教授が最初というわけではなく、私の乏しい知識では、昭和七年一月発行の『立命館学叢』に発表された、岡田希雄氏の「和名類聚抄中の撥音的地名」があります。

岡田氏は、安藝国高宮郡の郷名「刈田 加無多」の項で、次のように述べています。

さて刈田の訓加無多は撥音としてのカンダであらう。リガソと成るのは珍しく無い。但しカリタは一方では促音化してカッタと成る事も有るから、他の例は

刈田 葛田 (讃岐郡名、今の豊田郡、古くカッタと云つた、

刈田 葛太 (陸奥郡名)

と成つて居る。豊前国京都郡の郷名は和名抄には訓註が無いが、中世は神田と呼んで居た。やはり撥音化したのである。讃

岐の刈田郡も神田郡と云うた事がある (割注は省略した)

右の記述は、促音・撥音がモーラとして確立する以前の、表記の交錯の例としても興味があります。岡田氏はまた、山城国乙訓郡訓世郷 (訓勢に誤る) の項では、訓注の「郡勢」について、

「郡勢」を何と訓むか不明であるが、恐らくはクンゼと云ふ風に撥音として訓めと云ふのであらう。豊後の国崎を君佐木、安藝国沼田郡の真良を新良シラノ、高山寺タカヤマと訓ませて居るのと同例と見る可きであらう。

と述べています。佐佐木氏の言わんとすることは、岡田氏の論文につくされていると言つていいでしょう。

佐佐木氏の稿は「これは、文字用法の歴史のうえで注目すべきことである。」と結ばれています。右の岡田論文でも、稿末に括弧して、「国語撥音の標記史的考察」の(二)と書かれており、その意図はくみとることが出来ます (その一に当る論文は、その一と月前発行の『立命館学叢』に載っており、私も昔読んだはずですが、今でもとくに写しがなく、内容には言及することができません)。

私よりはるかに若い佐佐木氏が(いつもの慎重さに似合わず)、この岡田論文を読んでいなかったことはやむをえないと思いますが、編集委員のどなたも気づかなかったらしいことは、ちょっと意外でした。あるいは△短信△欄への投稿は審査しないのでしょうか。百五十編、六千ページに近い論考をもつ岡田氏の仕事はもっと称揚されていいとは、私の師たちのよく口にすることはでした。

—— 岐阜大学教授 ——

(昭和五十九年九月二十九日 受理)